



Title	専門高校からの大学進学 : アスピレーションの推移の分析から
Author(s)	中村, 高康
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2006, 32, p. 125-144
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12716">https://doi.org/10.18910/12716</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 専門高校からの大学進学

—アスピレーションの推移の分析から—

中 村 高 康

### 目 次

1. はじめに
2. 分析視角—アスピレーション加熱と選抜制度—
3. 専門高校生における大学進学への志望変更の実態
4. アスピレーション平均値の全体変化に対する大学志望への加熱分の寄与
5. 専門高校からの大学進学と推薦入学
6. 推薦入学制度は進学を促進する効果があるか？
7. 結論



## 専門高校からの大学進学 —アスピレーションの推移の分析から—

中村 高康

### 1. はじめに

高等教育の大衆化・ユニバーサル化に伴って、従来ではあまり進学してこなかった層の高校卒業生が大学に進学するようになったといわれる。このことはリメディアル教育の問題、大学生の学力低下の問題、高校－大学接続問題など、様々な話題を提供するものとなっている。入学してくる学生の層が変われば、大学の様々な側面で変化が引き起こされるため、この大学入学者の変化は我々が想像する以上に大学というシステムにとって大きな変化であるかも知れない。

では、このような変化の側面を捉える場合、どの部分に注目すべきだろうか。まず考えられるのは、まさにこれまで進学を念頭においてこなかったような高校からの大学進学という現象を検討することである。専門高校は、かつて職業高校と呼ばれ、職業的知識・技術を教えるを中心とする完成教育の機関であり、大学進学などほとんど意識されていない存在であった。しかし、平成8年度に専門高校卒業生特別選抜が大学入学者選抜実施要項に明記されたことに象徴されるように、近年は大学進学というものに無縁な存在ではなくなっているのである。文部科学省の平成15年度学校基本調査から計算すると、普通科・総合学科・その他<sup>1)</sup>以外の専門学科からの四年制大学進学率は、12.1%になる。さらに図1に示すように、専門学科からの4年制大学進学率は近年急激な上昇を見せている。

そこで本稿では、高等教育における近年の変化を捉えるのに適した対象の一つとして専門高校からの大学進学を取り上げたい。そのうえでこの現象を単なる大学の量的拡大の帰結として捉えるのではなく、現代日本の教育システムの特質を考察するきっかけを与えるものとしてとらえたい。以下では、まず本稿の基本的分析視角をより具体的に提示する。そのうえで、報告者が別の研究で示した専門高校生のアスピレーション加熱現象のうち、その少くない部分が就職志望から大学志望への変更で説明されることを示す。後半では、この専門高校生の大学進学への志望変更（加熱）が選抜制度の問題とも密接に関わっていることを傍証的に示していきたいと思う。

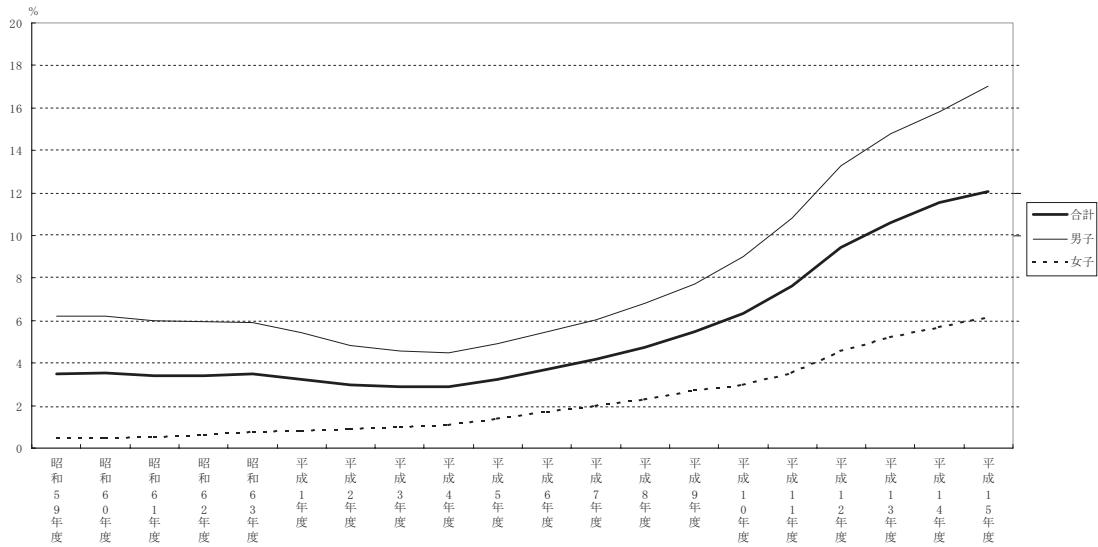


図1 専門学科（総合・その他を除く）の四年制大学進学率の推移

資料：文部科学省『学校基本調査報告書』各年度版より報告者作成

## 2. 分析視角－アスピレーション加熱と選抜制度－

専門高校からの大学進学を説明する外的要因としては、第一に、大学入学枠の増大と少子化の影響で大学に入りやすくなっていることが挙げられる。第二に、不況の影響で高卒労働市場が非常に厳しい状況であるために、就職が困難であるという状況がある。しかしながら、もともと高校入学段階では必ずしも成績良好とはいはず高卒後にすぐ就職することを考えていたような生徒を多く抱える専門高校において、短大や専門学校を飛び越えて大学に進学するためには、彼らを大学進学へと誘導するなんらかの社会的仕組みが存在するはずである。そこに日本における大学の大衆化・ユニバーサル化の一端を支える現象を見いだすことができるのではないだろうか。

その点に関して、筆者が数年前に行った日韓比較研究のデータは、一つの議論のきっかけを提供しうる（中村 2002）。図2は、2000年に行った日韓高校生調査で得られた、国別高校学科別男女別の教育アスピレーションの平均値の推移を示したものである<sup>2)</sup>。教育アスピレーションに関する質問項目は、「あなたは、次の各時期に、どの段階の学校まで進みたいと思っていましたか」というもので、「小学生の頃」「中学入学の頃」「高校入学の頃」「高校2年の夏頃」の各時期について尋ねている。現在については、「あなたの高校卒業後の希望進路は次のうちどれですか」という項目である。これらの

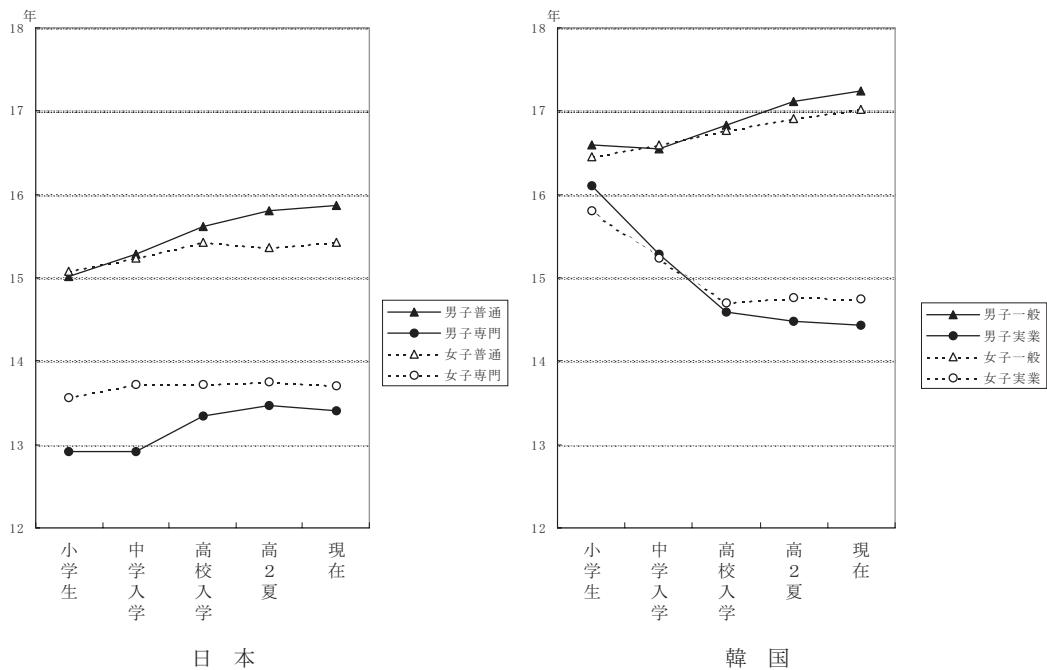


図2 学科別・男女別・教育アスピレーションの変化（中村2002）

回答を教育年数に換算して平均値をとり、各時点を繋げてえられたのが図2のグラフである。得られたデータはランダムサンプリングによるものではなく、また高校三年時より前の値は回顧的な項目であるため、限界はある<sup>3)</sup>。しかし、ほぼ同じ条件で集められた日韓のデータにおいて大きな違いが見られるならば、それはなんらかの両社会の違いを反映しているとみてよいと思われる。ここで注目したいのは、専門学科（韓国では実業系）の違いである。日本以上に高校生の大学進学率が高い韓国で、実業系はアスピレーションが冷却されて下降するのに対して、日本の専門学科の生徒は、逆にアスピレーションを上昇させているのである。日本の専門高校生に見られるアスピレーション上昇という現象は、韓国の実業系高校生では見られない以上、これは高等教育の大衆化・ユニバーサル化に伴って自動的に生じるものとはいえない、ということになる。そこで本稿の前半では、この日本の専門高校におけるアスピレーションの平均値上昇が具体的にどのような志望変更の影響によって引き起こされているのかを特定する作業を行う。すなわち、就職希望から専門学校希望に変わった者の影響か、短大から大学への志望変更者が影響したのか、あるいは本稿で扱うような大学進学へのアスピレーション上昇が影響したのか、などの具体的実態を明らかにする。結論を先取りして言えば、このアスピレーション上昇のかなりの部分について、当初の就職志望者が最終的に短大や専門学校を飛び越えて大学進学志望に変化することによって引き起こされることを示したい。

しかしながら、それだけでは専門高校からの大学進学を誘導するメカニズムが明らかではない。これまでの研究においても、そもそも専門高校からの大学進学自体が明確な研究ターゲットとされていなかったため、この点に関する知見は少ないので現状である。その中で、江原がかなり以前に職業科からの進学のメカニズムに言及していた点は注目される（江原 1984）。そこでは2つのパターンが指摘されており、その一つとして、進路希望が不明なまま職業科に進学し、高校在学中の学業達成を契機にして進学希望に転じたグループが挙げられている。江原のデータは1968年3月卒業者のものであり、時間的な隔たりは大きいが、おそらくは先程来指摘している専門高校のアスピレーション加熱パターンの萌芽的事例はこの時代からすでに見られていたのだと思われる。しかし、そこでは、学業達成を契機として志望変更が生じることを指摘するにとどまっている。

その点で参考になるのはシムの研究である（シム 2004）。シムは、筆者らの日韓比較調査と同様の質問項目を用いた調査をシンガポールで行い、職業系中等教育機関におけるアスピレーション加熱現象を見いだした。そこで結論は、シンガポールの教育システムにおける明示的な敗者復活ルートの存在や学校側の焚き付けの仕組みであった。日本においてこれとまったく同じメカニズムが作動しているとは考えるのは単純すぎるが、日本でも専門高校の生徒たちに対して比較的「焚き付け」が容易な形の選抜制度を作っており、またそれに向けた学校側の「焚き付け」の仕組みもあるのではないか。教育拡大の中で登場したマス選抜の制度としての推薦入学（中村 1996）はそうしたものとして捉え直すことが出来る。中村は、大学生へのアンケート調査データの分析から、職業科出身者で一般入試による大学入学者がきわめて少ないことを指摘しており（中村 1997）、また荒川も専門高校の大学進学においてはほとんどが推薦入学になっており、学校側も生徒が進学希望の場合は推薦入学に向けた指導を行っている現状を事例的に明らかにしている（荒川 2000）。したがって、これらの研究を踏まえれば、学業達成の他に、マス選抜装置としての推薦入学の普及も、彼らにとって進学を前向きに考える一つの誘因となっている、という仮説を考えることが出来る。そこで本稿の後半では、選抜制度が専門高校の生徒にとって大学進学を促進する効果を持ちうるか否かを、さしあたり手持ちのデータから傍証的に検討してみたい。

### 3. 専門高校生における大学進学への志望変更の実態

筆者のこれまでの分析では、日本の専門高校の生徒は、特に男子において顕著であったが、小学校時、中学入学時、高校入学時、高校二年の夏、そして現在と時間を経るに

したがって、教育アスピレーションの平均値が徐々に上昇する傾向にあった。しかし、この分析の時点では「中学段階で高校までと思っていた人が高校に入学すると『大学まで行けそだから行こう』と考えはじめる、いわば跳び箱の踏み台のようなメカニズム」(踏台効果) (中村 2002、82 頁) を仮説的に指摘するに留まっており、そこではその平均値上昇の具体的な内容については分析していない。すなわち、就職希望から専門学校希望に変わった者の影響か、短大から大学への志望変更者が影響したのか、あるいは本稿で扱うような大学進学へのアスピレーション上昇が影響したのか、などの具体的な実態が不明であった。そこで同じデータを用いて、その実態から明らかにしてみたい。

まず、これらの項目に対してすべて漏らさず回答したサンプルのみを対象とし、現在(高校 3 年生の春)において大学を志望しているもののみを取り出し、かれらが以前の各時期にどのようなアスピレーションを示していたのかを高校タイプ別に集計してみた。普通科 A、普通科 B、普通科 C は、調査対象の普通科高校を入学難易度の高い順に分類したものであり、中村他編 (2002) と同じ分類を用いている。その結果が以下の図 3～10 である。左端の「小学校時」については、記憶が最も不鮮明と考えられるうえ、未定と回答するケースがかなり多かったため、傾向としては中学入学時以降から見ていきたいと思うが、参考までに図には記しておいた。

図 5～8 の普通科 A・B のデータを見ればわかるように、高校階層構造上の比較的上位に位置する高校で大学進学を希望する生徒は、かなり早い段階からその志望を固めている。しかし、図 3・図 4 に見られるように、専門高校では、早い段階から大学進学を希望していたケースは普通科 A や普通科 B に比べてかなり少なくなっている。これは普通科 C も同様の傾向を示している。例えば男子の場合、普通科 A の大学進学希望者 216 人のうちで、中学入学段階でも大学以上の進学を志望していた生徒は 160 人 (74.1 %) に上る。普通科 B の場合は、136 人中の 83 人 (61.0 %) である。しかし、普通科 C

図 3 大学以上を志望する専門高校男子の過去のアスピレーション

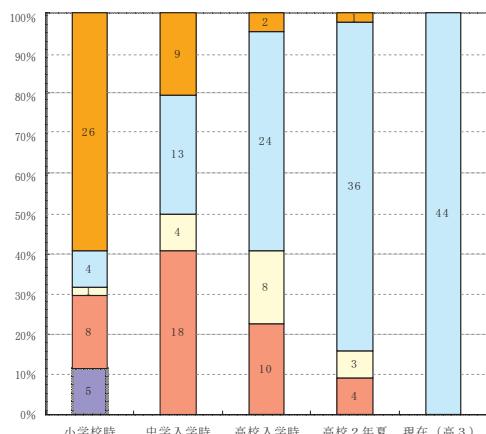


図 4 大学以上を志望する専門高校女子の過去のアスピレーション

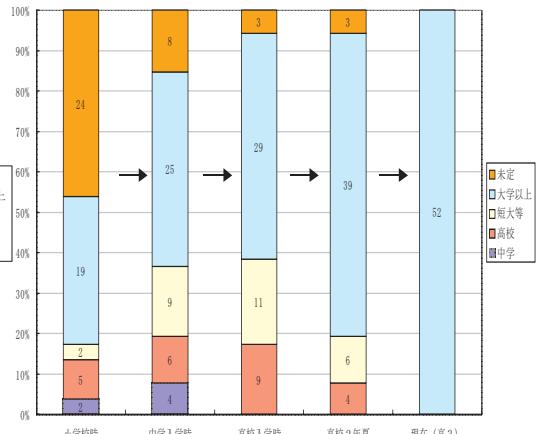


図5 大学以上を志望する普通科高校A男子の過去のアスピレーション

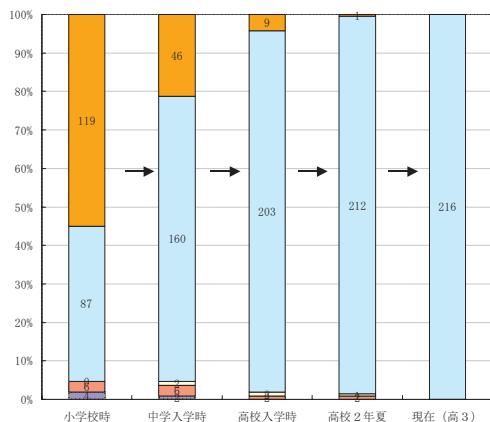


図6 大学以上を志望する普通科高校A女子の過去のアスピレーション

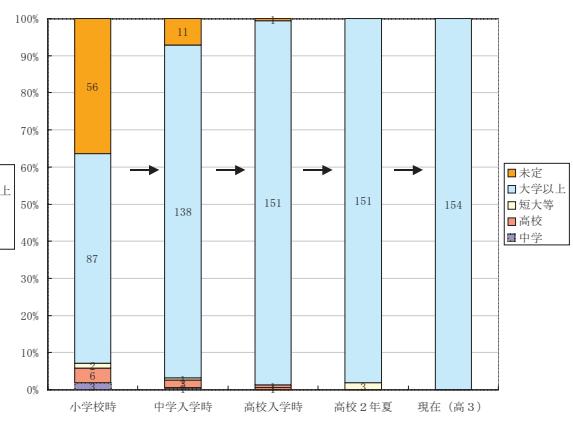


図7 大学以上を志望する普通科高校B男子の過去のアスピレーション

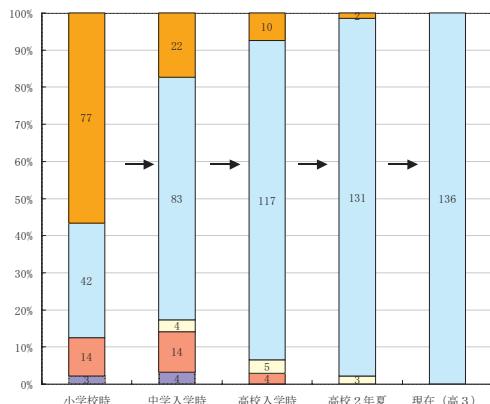


図8 大学以上を志望する普通科高校B女子の過去のアスピレーション

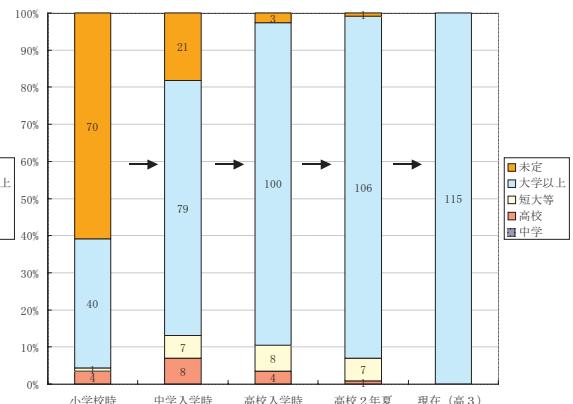


図9 大学以上を志望する普通科高校C男子の過去のアスピレーション

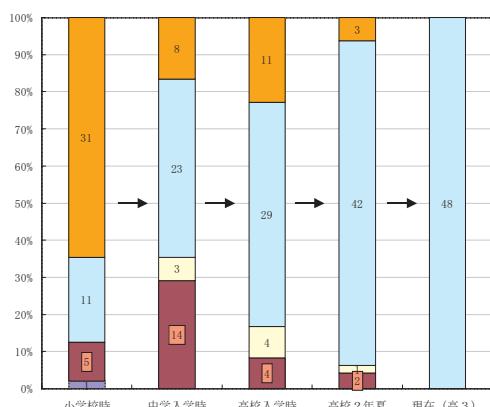
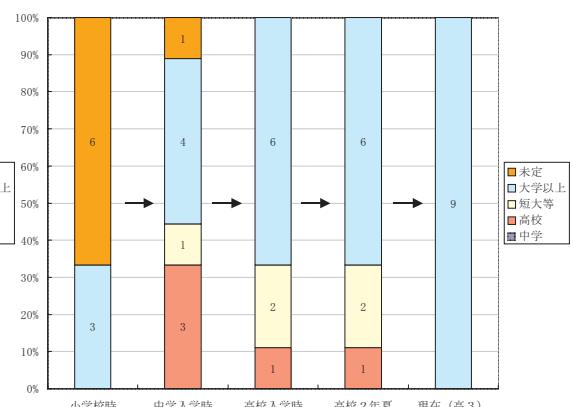


図10 大学以上を志望する普通科高校C女子の過去のアスピレーション



同じ数値は48人中23人(47.9%)、専門高校では44人中の13人(29.5%)に過ぎない。このことが示しているのは、非進学高校、とりわけ専門高校からの大学進学は、

もともと大学以上に進学することを考えてもいなかった層があとから大学進学に志望変更して実現している面がかなり大きいということである。しかし、専門高校全体のアスピレーション平均値の上昇に対する影響力の大きさはここではわからない。そこで次にその点を検討してみよう。

#### 4. アスピレーション平均値の全体変化に対する大学志望への加熱分の寄与

では、この専門高校における大学進学へのアスピレーション上昇は、中村（2002）で指摘されたアスピレーション平均値の上昇のうち、どれくらいの比重を占めるものなのだろうか。これが、就職志望→専門学校志望や就職志望→短大志望といった志望変更に比べてわずかな影響しかないとすれば、この現象から専門高校のアスピレーション全体の加熱現象を説明することには無理があることになってしまう。

そこで、寄与率の計算方法を参考に、それぞれの具体的なアスピレーション変化のパターンが全体の平均値上昇にどれだけ寄与しているかを計算してみよう。

全体のアスピレーション平均値の上昇は、中学入学時の平均値 $M_{中}$ と現在の平均値 $M_{現}$ の差である。各個人のアスピレーションの値について中学入学時を $A_{中}$ 、現在の値を $A_{現}$ 、サンプル数を $N$ とすれば、次の式で表される。

$$\begin{aligned} M_{現} - M_{中} &= \{(\sum A_{現}) / N\} - \{(\sum A_{中}) / N\} \\ &= \{\sum (A_{現} - A_{中})\} / N \end{aligned} \quad \cdots (1)$$

この式（1）における $A_{現} - A_{中}$ は、次の表1のパターン $a_{ij}$ に集約される。ここで $i$ は中学段階での希望教育段階を、 $j$ は現在の希望教育段階を表す。 $n_{ij}$ は各パターンの実際の人数であり、 $\sum n_{ij} = N$ である。すると、式（1）は次のように変形できる。

$$\begin{aligned} M_{現} - M_{中} &= \{\sum (a_{ij} \times n_{ij})\} / N \\ &= a_{11} \times n_{11} / N + a_{12} \times n_{12} / N + \dots + a_{46} \times n_{46} / N \end{aligned} \quad \cdots (2)$$

式（2）において、全体のアスピレーション平均値の変化は、各項 $a_{ij} \times n_{ij} / N$ の総和として表せるため、各項は、それぞれのアスピレーション変化のパターンが実際に全体の平均値をどれだけ押し上げたか（または押し下げたか）を表していることになる。パターンは全部で24通りあるが、ここでは、主として進学を意図していなかった生徒が大学進学に志望変更するパターンが、全体のアスピレーション上昇にどの程度影響して

いるのかを探るのが主眼であるので、アスピレーション変化のパターンを表1最右列のように分類し直した。

表1 アスピレーション変化のパターンの分類

中学入学時の希望	教育年数(A)	現在の希望	教育年数(B)	aspiration の変化(A-B)	記号 $a_{ij}$	分類
中学	9	高校	12	3	$a_{11}$	Y
高校	12	高校	12	0	$a_{12}$	—
短大・高専・専門	14	高校	12	-2	$a_{13}$	C <sub>3</sub>
大学	16	高校	12	-4	$a_{14}$	C <sub>2</sub>
大学院	18	高校	12	-6	$a_{15}$	C <sub>2</sub>
未定	平均値	高校	12	12-平均値	$a_{16}$	X
中学	9	短大・高専・専門	14	5	$a_{21}$	W <sub>3</sub>
高校	12	短大・高専・専門	14	2	$a_{22}$	W <sub>3</sub>
短大・高専・専門	14	短大・高専・専門	14	0	$a_{23}$	—
大学	16	短大・高専・専門	14	-2	$a_{24}$	C <sub>1</sub>
大学院	18	短大・高専・専門	14	-4	$a_{25}$	C <sub>1</sub>
未定	平均値	短大・高専・専門	14	14-平均値	$a_{26}$	X
中学	9	大学	6	7	$a_{31}$	W <sub>1</sub>
高校	12	大学	16	4	$a_{32}$	W <sub>1</sub>
短大・高専・専門	14	大学	16	2	$a_{33}$	W <sub>2</sub>
大学	16	大学	16	0	$a_{34}$	—
大学院	18	大学	16	-2	$a_{35}$	Y
未定	平均値	大学	16	16-平均値	$a_{36}$	X
中学	9	大学院	18	9	$a_{41}$	W <sub>1</sub>
高校	12	大学院	18	6	$a_{42}$	W <sub>1</sub>
短大・高専・専門	14	大学院	18	4	$a_{43}$	W <sub>2</sub>
大学	16	大学院	18	2	$a_{44}$	Y
大学院	18	大学院	18	0	$a_{45}$	—
未定	平均値	大学院	18	18-平均値	$a_{46}$	X

※現在未定のケースは除外した。

当然ながら全体の変化は、これらの合計値に一致する。すなわち、

$$M_{\text{現}} - M_{\text{中}} = W_1 + W_2 + W_3 + C_1 + C_2 + C_3 + X + Y \quad \cdots (3)$$

$W_1$ =高校以下から大学以上への志望変更（加熱）の項の合計

$W_2$ =短大等から大学以上への志望変更（加熱）の項の合計

$W_3$ =高校以下から短大等への志望変更（加熱）の項の合計

$C_1$ =大学以上から短大等への志望変更（冷却）の項の合計

$C_2$ =大学以上から高卒就職への志望変更（冷却）の項の合計

$C_3$ =短大等から高卒就職への志望変更（冷却）の項の合計

$X$ =中学入学時の進路未定者（未定者参入効果）の項の合計

$Y$ =その他の項の合計

である。専門高校において、男女別にこの計算結果を示したのが、表2である。

表2 各加熱・冷却パターンのアスピレーション変化への寄与

		専門男子	専門女子	普通科C男子	普通科C女子
高校以下→大学以上	$W_1$	0.358	0.225	0.533	0.175
短大等→大学以上	$W_2$	0.040	0.087	0.057	0.025
高校以下→短大等	$W_3$	0.299	0.212	0.210	0.300
大学以上→短大等	$C_1$	-0.100	-0.147	-0.210	-0.350
大学以上→就職	$C_2$	-0.269	-0.312	-0.190	-0.150
短大等→就職	$C_3$	-0.080	-0.182	-0.076	-0.075
未定者の参入	$X$	0.101	0.026	0.030	0.018
その他	$Y$	0.035	0.030	0.000	0.075
合計	全体	0.384	-0.061	0.354	0.018

※網掛け部分は、平均値上昇に最も寄与しているもの。

なお、参考までに、前節で専門高校生と類似した傾向を持っていた普通科Cについても計算してみた。これを見ると、専門男子および普通科C男子において、中学入学時に高校までと思っていたのに現在大学進学を志望している生徒たち（ $W_1$ ）の存在が、全体のアスピレーション上昇に対して、非常に大きく作用していることが明らかである。高校から短大等（男子なのでそのほとんどは専門学校志望である）への志望変更もかなりの程度全体の上昇に寄与しているが、短大等（専門学校）から大学への志望変更はあまり影響力がない。女子については、全体のアスピレーションの変化自体がほとんどないが、これは男子よりも大学への志望変更が少なく、専門高校では就職、普通科Cでは短大等への冷却パターンが男子の場合よりも多いためである。しかし、女子においても大学進学への加熱は全体のアスピレーションの下降を押し止めるのに一定の効果を持っているといえる。また中学入学時における進路未定者の参入はあまり影響していないので、それによって全体の構造が変わることはないこともわかる。

以上の結果から、中村（2002）に見られた専門高校（特に男子）のアスピレーション加熱現象は、短大・専門学校への進学によって高められているだけではなく、それらを飛び越えて大学へと志望上昇させていくことによる部分が大きいということが明らかとなったといえる。では、専門高校生を一気に大学進学志望へと引き上げるにはどのような社会的メカニズムが想定されるのだろうか。

## 5. 専門高校からの大学進学と推薦入学

冒頭でも述べたように、大学入学枠の拡大と少子化、そして就職難は、専門高校からの大学進学を促進する外的要因である。しかしながら、これらの外的条件がストレートに専門高校からの大学進学者を増大させるとは限らない。なぜなら、彼らの多くはもともと進学を希望していなかった生徒たちであり、彼らが進学希望に切り替え、しかも専門学校や短期大学を希望しないことによってはじめて、大学進学者数の拡大が実現すると考えられるからである。実際、前節までの分析結果はこのような解釈が可能であることを示唆している。

では、もともと大学進学を念頭においていなかった高校生たちが大学を希望するようになる場合、そこには上にあげた構造的要因以外にどのような促進要因が関わっているのか。様々な要因が考えられるだろうが、本稿では選抜制度－特に推薦入学制度－との関連を考察する。それは単なる筆者の関心のみから取り上げたわけではない。そもそも以前より職業系の学科からの大学進学と推薦入学は密接な関係があり、現時点でもそうであると考えるからである。

なぜ冒頭紹介した専門高校卒業生選抜（平成9年度より専門高校・総合学科卒業生選抜）を取り上げないのかといえば、端的に言ってこれは進学率の上昇にほとんど関係していないといえるからである。表3はこの制度の実施状況を示しているが、実施大学数も入学者数もきわめて少なく、ここ数年は増える傾向さえ認められない。最右欄は、専門高校（その他除く）からの大学進学者の中でこの制度による入学者が占める割合を示しているが、平成15年度では0.83であり、進学者100人に対して1人にも満たない。現時点でのこの制度の社会的機能といえば、「専門高校には特別な枠があって普通科の高校生と競争しなくても進学できる道がある」ということを社会的に知らしめる象徴的効果にとどまっているといわざるをえない。

この制度が普及しない理由の一つとして、この制度が「職業に関する教科・科目の学力検査の成績などにより判定する方法」（大学入学者選抜実施要項、下線は引用者）と

表3 専門高校・総合学科卒業生選抜の推移

	実施大学数				志願者数				入学者数				専門・総合卒業生選抜が占める割合(%)
	国立	公立	私立	合計	国立	公立	私立	合計	国立	公立	私立	合計	
平成8年度	1	0	4	5	25	0	409	434	15	0	223	238	1.37
平成9年度	6	0	10	16	129	0	408	537	43	0	226	269	1.41
平成10年度	10	0	17	27	170	0	548	718	58	0	253	311	1.47
平成11年度	15	1	22	38	231	20	636	887	79	10	322	411	1.73
平成12年度	16	1	19	36	284	25	460	769	90	15	196	301	1.06
平成13年度	16	2	21	39	222	30	368	620	85	16	197	298	0.96
平成14年度	16	2	20	38	269	31	364	664	81	13	205	299	0.90
平成15年度	16	2	19	37	232	34	306	572	72	18	191	281	0.83

注：平成8年度のみ名称が「専門高校卒業生選抜」。

資料：文部科学省「国公私立大学入学者選抜実施状況」(各年度)より作成

されている点が大きいのではないか。平成8年に早速この制度を導入した新潟大学工学部の場合を見ると、センター試験4教科を受験した後に個別学力検査で工業に関する科目を課すことになっている(谷藤1996)。それに対して、推薦入学は本来学力検査を課さなくてよい制度である。専門高校の生徒にとっては推薦入学制度のほうが扱いやすいと考えられている可能性が高い。実際、職業科からの推薦入学制度は、すでに1950年代の時点で多くの高校から賛成されていたとの調査結果があったといわれる(雨宮1956)。また1970年代においては、職業高校出身者の推薦入学状況について当時の文部省が調査をしている(文部省大学局大学課1975)。これは当時の文部省が職業高校の進学問題と推薦入学を明確に結びつけて考えていたことを示している。また、80年代では、「大学入学者選抜における職業高校生に対する配慮について－産業教育の改善に関する調査研究における検討まとめ－」(文部省初等中等教育局職業教育課)において、推薦入学における職業学科卒業生の特別枠の設定を提起している。90年代には、理科教育及び産業教育審議会答申(1998)において専門高校生に対する推薦入学や専門高校卒業生選抜の一層の拡大が提言されている。このように、専門高校からの大学進学は、近年急に話題になったわけではなく、また推薦入学をその促進手段と見る捉え方も実はかなり古くからある。こうした経緯を踏まえると、推薦入学が制度的に公認された60年代半ば以降から、実態としてもすでに職業高校からの進学促進要因として推薦入学制度が機能してきたのではないかと推測されるのである。ちなみに先程指摘した1975年度の大学入学者選抜実態調査において、職業科出身者の推薦入学者(短期大学を含む)は、この時点ですでに18,527名に上る。これは当時の職業科出身者の大学・短大進学者全体の約25%にあたる。このデータは短大を含んでいる情報しかわからないが、推

薦入学制度は当時の職業高校からの進学を支える中心的制度の一つにすでになっていた。したがって、現在については明確なデータがないが、専門高校からの大学進学について荒川（2000）が「ほとんどが推薦入学」と説明するのも決して誇張でないと考えられる。90年代後半は、推薦入学もAO入試も拡大し、この二つによる大学入学者を合計すると大学入学者全体の約4割に達することがわかっているが（中村2004）、これと専門高校からの大学進学率の急上昇は、まったく無関係とはいえないと思われる。

こうした状況の中で、専門高校における進学指導で推薦入学が強調されるという事態も指摘されている（荒川2000）。高校教育研究においてはこうした事例が少しづつ紹介されるようになっている（例えば、酒井2004）。もちろん、こうした研究に頼らずとも、インターネットで検索すれば推薦による大学進学が可能であることを説明する専門高校のホームページをいくつも見ることができる。また、高校や高校生の進路情報として無償で配られている『専門高校生のための進学ガイドブック05』（産業教育振興中央会）でも、推薦入学やAO入試を使うことを勧めている。このように、進路指導をする側においても、推薦入学はきわめて重要なルートであり、そこへ誘導するかのような指導や情報提供が実際に行われているのである。

## 6. 推荐入学制度は進学を促進する効果があるか？

では、実際の専門高校生には、推薦入学はどのように受け止められているのか。この点については、推薦入学そのものへの意識に関する直接的なデータは手元にない。そこで、調査書重視の選抜への賛否に関するデータで探っていく。直接的な実証にはならないが、調査書重視の選抜の代表格が推薦入学であるから、間接的な情報はこれで得ることができるだろう。

図11は、データソースは本稿の前半で用いたものと同じ調査のものであり、高校タイプ別・学校内成績別の筆記試験・内申書の賛成者の比率を示している。なお、高校タイプは入学難易度が高いA、入学難易度が中ぐらいのB、入学難易度が低いC、そして専門学科という区分をしている。これを見ると、筆記試験のほうは、明らかに入学難易度の高い高校・学校の成績が良い高校生ほど、賛成する比率が高くなっている。筆記試験が日本においてエリート選抜の基準となっていることを裏づけているデータである。一方、内申書の方は、高校タイプで見るとおおむね入学難易度の高いほうで賛成する比率がやや低くなっているが、同一高校タイプで見ると明らかに学校内成績が高いグループほど高い支持をしていることがわかる。内申書は、エリート選抜の方法としては必ず

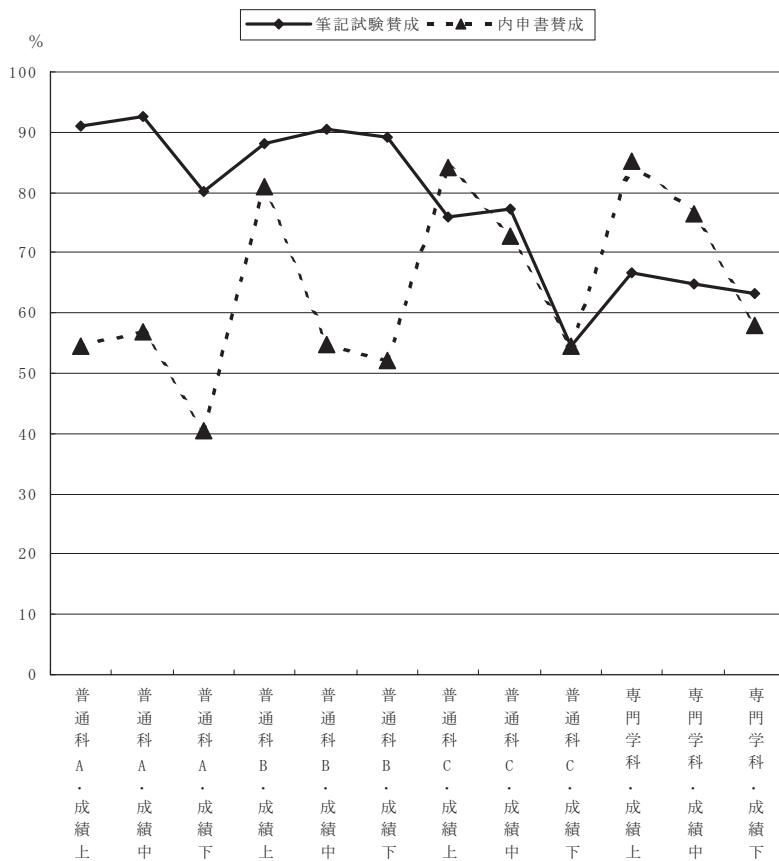


図 11 選抜方法に対する高校生の意識（中村 2004）

しも機能していないが、一定の学力層をすくい出そうとするマス選抜の方法として定着していることを示しているものと思われる。そして、専門学科、特にその成績優秀層は明らかに内申書を支持している。したがって、このデータから、専門学科では、推薦入学が進学を希望する生徒たちを中心にかなり支持されていると推察される。

では、この内申書への支持は、前半で指摘した大学進学へのアスピレーション加熱と関連があるのだろうか。前半で示した大学進学へのアスピレーション加熱をした者の人数がサンプルにおいて小さくなるため、ここではさきほど専門学科と同様の傾向を示した普通科Cのサンプルを加え（以下、非進学校とする）、その上で煩雑さを避けるため、男子に限定して検討してみた。

非進学校男子で中学入学時に大学以上を志望していなかった者が現在大学以上の進学を希望しているケースを1、非進学校男子で中学入学時に大学以上を志望していなかった者で現在も大学以上の進学を志望していないケースを0として（大学進学加熱ダミー）、

これと内申書（調査書）への賛否意識の関係をまず見てみよう（図12）。

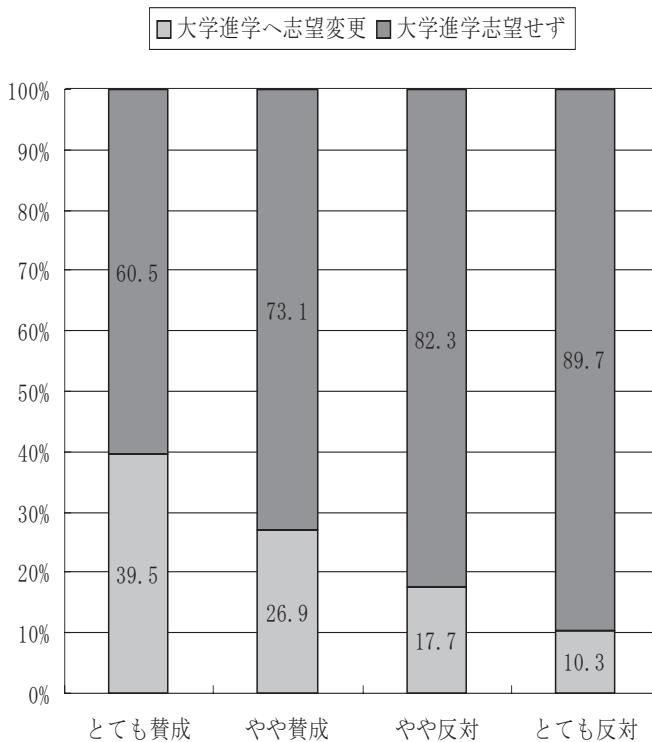


図12 内申書肯定意識と大学進学への志望変更の関係

この図12から明らかなように、大学入試の方法として内申書（調査書）を利用するに賛成の気持ちが強い生徒ほど、大学進学へと加熱されている傾向がある。しかし、この関係は疑似相関である可能性もある。最もその可能性が強いのは、成績の影響である。そこで成績を含めたいくつかの変数も加えて、大学進学加熱ダミーを従属変数とするロジスティック回帰分析を試みた<sup>4)</sup>。それが表4である。3通りの分析をしてみたが、いずれにおいても、内申書を支持する意識が強いほど、大学進学への加熱が生じるというふうに読める。これは成績などの他の変数を統制したうえでも変わらない。

データの制約のため、これはあくまで参考程度の分析に過ぎないが、内申書を支持する意識と大学以上への志望変更には関連がある。このことは、内申書を重視する選抜の代表的な制度である推薦入学の存在が、かれらを大学進学へと誘導しているか、あるいは大学進学を決めた生徒を結果的に下支えしている可能性を示唆しているのである。

表4 非進学校における大学へのアスピレーション上昇の規定要因  
(ロジスティック回帰分析)

独立変数	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
内申書肯定度	.5644**	0.5687	.4988**	0.6073	.4222*	0.6556
学校内成績			.3443*	1.4111	.2263	1.2539
成績の変化					.1483	1.1599
専門高校ダミー					-9.3369	0.0001
学歴決定論否定度					-.1972	0.8210
切片	.1360		-.9946		-.2771	
Model Chi-Square	9.86**		15.359***		54.125***	
-2 Log Likelihood	249.405		243.344		203.445	
Goodness of Fit	323.824		232.574		170.308	

\*\*\* : sig.<.001, \*\* : sig.<0.01, \* : sig.<.05

## 7. 結論

以上の検討結果をポイントだけまとめると、1) 専門高校生のアスピレーション加熱現象は、就職志望者が短大や専門学校を飛び越えて大学進学に志望変更することによる部分が少なくないということ、2) 歴史的に、専門高校からの大学進学の問題に、推薦入学制度は深く関連づけられており、実際の進学や高校での進路指導においてかなり利用されていること、3) 生徒の側の意識においても、内申書による選抜に賛成するものは、大学進学への志望変更者が多い傾向にあり、推薦入学制度が専門高校からの大学進学を促進あるいは下支えしている可能性があること、などを論じてきた。

日本社会において推薦入学制度というマス選抜装置が普及していたことは、もともと就職希望だった専門高校生においてさえ大学進学に目を向けることを容易にしたであろう。その結果、少子化・大学入学枠の拡大・就職難による大学ユニバーサル化時代において、本来就職中心だった専門高校が比較的スムーズに大学進学にシフト可能となり、専門高校の進路多様校化（耳塚 2000）が一気に進んだのではないだろうか。

このことは必ずしも楽観すべき事態ではない。職業教育中心の専門高校と一般の大学とを推薦入学が平易に繋いでしまったことは、高大接続の観点から再度検討すべき課題なのかもしれない。しかし、専門高校からの大学進学の問題は、アカデミックな観点から現代日本の教育システムの特質を理解する契機を与えてくれる。また政策的な観点においても、佐藤が指摘するように、従来の学生とはバックグラウンドが異なる専門高校生が大学に入ってくることによって「何らかの斬新なアイデア」（佐藤 2000、101 頁）

を生み出す可能性もあるように思われる所以である。教育研究においても、様々な角度からこの問題に関連する研究が今後必要とされるのではないか。今回の分析は、データの限界もあり、まだ十分な実証・精査に及んだわけではないが、この問題を扱う意味は提起できたのではないかと思う。不足の点は今後の課題としている。

### 注

- 1) 「その他」の内容は多様であるが、理数科なども含まれており、データ上では大学進学率は非常に高くなっている（平成15年度は50.4%）。そのため、ここでは除外した。
- 2) 進級したばかりの高校3年生を対象として、韓国版をソウル市と江原道のA市において2000年3~5月に実施、日本版を、東京都23区と鳥取県内のC市において2000年4~6月に実施した。サンプル数は韓国が1354名であり、内訳は、ソウル市が7つの高校の862名（男592、女270）、江原道のA市が5つの高校の492名（男243、女249）である。日本は1439名、内訳は東京都23区が7つの高校の1063名（男535、女528）、鳥取県C市が5つの高校の376名（男198、女178）である。詳しくは、中村他（2002）を参照。
- 3) こうした限界を乗り越えるためには、リアルタイムで変化を追っていくパネル調査を用いた研究が必要である。そのため、筆者は、共同研究という形で、高校入学時から卒業までを5時点で捉えるパネル調査を含んだ総合的な高校生の進路調査を開始した。なお、この調査設計については、中村他（2005）を参照。
- 4) 独立変数については、内申書（調査書）賛否意識は4段階評定、学校内成績は自己評価で5段階評定、学校内成績の変化は自己評価で5段階評定、専門高校ダメーは専門高校=1、普通科C=0、学歴決定意識は「どんな学校を出たかによって人生がほとんど決まってしまう」について、とてもそう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・まったくそう思わない、の4段階評定といった尺度の変数である。

### 参考文献

- 雨宮吉政 1956、「大学入試制度について」『教育社会学研究』第10集、47-53頁。  
 荒川葉 2000、「学習指導組織・進路指導組織」樋田・耳塚・岩木・苅谷編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、83-106頁。  
 江原武一 1984、『現代高等教育の構造』東京大学出版会。  
 耳塚寛明 2000、「進路選択の構造と変容」樋田・耳塚・岩木・苅谷編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、65-82頁。  
 文部省大学局大学課 1975、『昭和50年度大学入学者選抜実態調査』。  
 中村高康 1996、「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立」『教育社会学研究』第59集、145-165頁。  
 中村高康 1997、「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究－選抜方法多様化の社会学的分析－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第36巻、77-89頁。

- 中村高康 2002、「教育アスピレーションの加熱・冷却」中村高康・藤田武志・有田伸編  
2002、『学歴・選抜・学校の比較社会学－教育から見る日本と韓国－』東洋館出版社、  
73-89 頁。
- 中村高康・藤田武志・有田伸編 2002、『学歴・選抜・学校の比較社会学－教育から見る日  
本と韓国－』東洋館出版社。
- 中村高康 2004、「ユニヴァーサル化に連動した大学入学者選抜方法多様化の意味－「ボス  
ト・マス選抜」時代の課題に関する一考察－」大学入試センター研究開発部『アドミッ  
ション・ポリシーと入学受入方策』、105-118 頁。
- 中村高康・片山悠樹・西田亜希子・藤原翔 2005、「学校社会学における Mixed Methods  
Research の可能性－高校生の進路に関する三年間継続調査への適用－」『大阪大学教育  
学年報』(近刊)。
- 酒井朗・千葉勝吾・広崎純子・斎藤玲奈 2004、「高校生の進路選択に関する教育臨床学的  
研究(2)」第 56 回日本教育社会学会大会発表資料。
- 佐藤広志 2000、「職業科高校の分析－職業科高校卒業生の学習歴－」荒井克弘編『学生は  
高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部、85-101 頁。
- シム・チュン・キャット 2004、「シンガポールの教育とメリトクラシーに関する社会学的  
研究－再加熱装置としての技術教育校－」『教育社会学研究』第 74 集、269-288 頁。
- 谷藤克也 1996、「新潟大学工学部の入試改善－専門高校卒業生の受け入れと補習教育」文  
部省『大学と学生』第一法規、24-27 頁。

## University Admission from Vocational High School —A Study of Changes in Educational Aspirations—

Takayasu NAKAMURA

To date vocational high school graduates in Japan have been regarded as youth entering labor markets, rather than as progressing to higher education. However, many graduates from vocational high school now enter universities. In 2003, the advancement rate from vocational high school to four-year university is 12%. This shows that more vocational high school students are now being admitted to universities previously.

In fact, Nakamura(2002) found in a comparative study that Japanese vocational high school students were inclined to be warmed their aspirations up. However, this warming-up phenomenon in Japan is not always caused by the expansion of higher education, because the study also shows that South Korean vocational high school students are inclined to be cooled their aspirations down.

The purpose of this article is to investigate the mechanism of warming-up phenomenon at vocational high schools in Japan and to show that the high school recommendation system is a very important factor for university admission from vocational high schools. The main findings were as follows.

1. The warming-up phenomenon is statistically explained mainly by their aspirations to four-year university, rather than by their aspirations to two-year college or special training school.
2. The high school recommendation system has historically combined with university admission from vocational high school and is now combined for the career counseling process.
3. Vocational high school students are inclined to show positive responses toward the recommendation system.

According to these findings, this paper concludes that the recommendation system is likely to lead many vocational high school students to continue on to university.